日本人の暮らしから生まれた「民謡」を次世代へとつなぐため「民謡甲子園」を開催。

グランプリを受賞した内山五織さん（中央）。徳之島出身で郷土の唄を歌い続けている

生活の中で生まれ、愛され、歌い継がれてきた「民謡」だが、昨今は民謡離れが著しい。
社団法人 全大阪みんよう協会では、民謡文化を継承するために、若者だけを対象とした「日本民謡ヤングフェスティバル全国大会」を主催している。

「馬子唄」を「孫唄」と勘違いする今だからこそ、民謡を伝えていく意味がある。

民謡は日本人の暮らしの中から生まれてきた。それゆえに地域色が豊かで、人々の生活の情景や息吹が伝わってくる。また時として働きながら歌われて、仕事にリズムを与えたり、意欲を駆り立てるような効果をもっていた。

例えば「馬子唄」は、馬子（馬追い）が馬をひきながら歌う唄だし、「長持ち唄」はタンスを担ぎながら歌われてきたものである。

「でも今は生活が変わり、馬子を『孫』だと勘違いする人もいる」と全大阪みんよう協会の皆さんは残念そうに語る。

このままでは民謡がすたれ、文化の継承が果たせないと考えた同協会は、特に若者向けに民謡の普及を図るため、1990年に「日本民謡ヤングフェスティバル全国大会」を開催し、文化庁や地元自治体、NHK大阪放送局などの後援を受けて毎年続けてきたのである。

実は日本全国には150近くの民謡コンクールがあるのだが、若者向けの大会はこれだけだそうだ。大阪で開催されるということで「民謡甲子園」という別名もついた。出演者は高校生以上28歳以下に限定されている。かくして毎年多くの若者が参加するようになった。

「民謡の良さはいろいろありますが、歌ってみるととても気持ちがよいものなんです。のどだけではなくて精神も鍛えられる。感性や郷土愛も育まれます。そして昔の先達たちの暮らしや文化を伝えることができるんです。この大会がそのきっかけづくりになるといいと思います」（同協会

副理事長 岡川喜与士さん）

若者が参加しやすいように宿泊代を援助。

傍目には多くの後援もつき、17年間も続いているのだから順風満帆に見えるイベントだが、内情はかなり厳しいようだ。

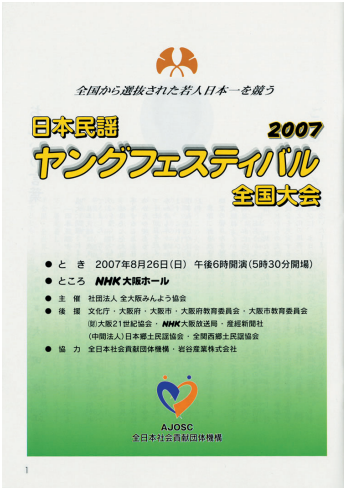
「テープ審査まではスムーズなのですが、それからが宿泊先の確保などがあってたいへんなんですわ」（同協会）

時には今の若者気質に振り回されることも多いそうだが、とりわけ深刻なのが台所事情である。若者への民謡普及がテーマであるだけに、参加者に大きな負担は掛けられないという理由で、参加者の宿泊費を協会が負担しているからだ。大会当日の入場料収入はあるが、毎年のように赤字で、これまでに何度も支援をやめようという話が出た。

「そのたびにここでやめたら民謡文化の火が消えてしまう、と気を取り直して続けてきた17年間なんです。2007年は特に厳しい状況でしたが、図らずもAJOSCさんの助成をいただいて本当に助かりました」同協会の荒川智津恵理事長はそう語る。

そうした協会の努力が実り、2007年8月26日、NHK大阪ホールで17回目の全国大会が催される運びとなった。

全国から集まった若者30人が自慢ののどを競った。その様子はNHKで放送されたのでご覧になった方もいるかもしれないが、実にレベルの高いコンクールとなった。見事グランプリを受賞したのは鹿児島県民謡「烏賊曳節（いきゃびきぶし）」を歌った内山五織さん。「三線（サンシン）」と呼ばれる沖縄の三味線を演奏しながらの歌唱だった。内山さんは優勝できたので来年もゲストで出演できると大喜びしていた。



日本民謡　ヤングフェスティバル2007のプログラム

「大会前でも出演が決まったことを本人に知らせると、本人だけではなく家族も本当に喜んで、みんなで応援に来ます。そういうのを見ると続けていて良かったと思いますね」

中には大会後も村をあげて応援をしているというケースもある。1人の参加者が回りの複数の人に民謡の輪を広げるきっかけとなっている。確実に同協会の試みは成果をあげていると言えそうだ。

●担当者より　私たちの主旨をご理解いただいてありがうございました。

社団法人 全大阪みんよう協会

理事長
荒川智津恵さん

副理事長
岡川喜与士さん

副理事長
渡辺松海さん

常任理事
浅野行雄さん

AJOSCさんには民謡を次の世代に残したいという大会への願いをご理解いただいて、助成をいただき、また平山郁夫名誉会長にもお越しいただいてありがとうございました。今の若者はテクニックはたいへん素晴らしいのですが、本当の民謡の意味を理解するのには時間がかかります。ですから少しでも若いうちに民謡に触れていただきたいと思い、今は幼児から中学生を対象とした大会も始めています。これからもご支援いただければ幸いに存じます。